

[要旨]

フランス領アルジェリアにおける植民者アイデンティティと 植民地暴力（1945～1962年）

——入植植民地における植民者のアイデンティティ形成と暴力の正当化との関係——

ロタード アレキサンダー

本研究は、入植植民地（Settler Colonies）における、植民者のアイデンティティ形成と植民地暴力の正当化や行使との関係を検討した。この問題を掘り下げるために、フランス植民地支配下のアルジェリアにおける暴力の正当化について、これに対する英国側の認識を考察することを通して分析した。アルジェリアにおける植民地暴力に関する近年の研究は、広義の植民地暴力という問題から離れ、セティフとゲルマ虐殺などといった狭義の暴力的事変に集中している。

本稿は、これまで軽視されてきた植民者のアイデンティティ形成と植民地暴力との関係の検討を通じて、広義の植民地暴力という問題を再考察する。ファノンが採用した心理学的アプローチを利用しながら、特定の暴力的事変に対する内地や外地の反応を検討する。本稿は、ヨーロッパの人種主義的認識が、「他者」である被植民者の非人間化を通してのみならず、植民者のアイデンティティ形成過程を通して植民地暴力を正当化したことを論じた。

ただし、本研究は、心理学者アルバート・バンデューラの「道徳離脱理論」（Moral Disengagement Theory）やアマルティア・センのアイデンティティや暴力に関する思想を植民地支配の文脈に当てはめることによって、被植民者の反乱に対する暴力を植民者が自由意志によって選択できるとする議論に疑問を呈し、植民地社会の基盤となった人種主義的認識は、ヨーロッパの多数のアイデンティティを単一のアイデンティティ：「植民者」にしたと論じた。この過程を通して、被植民者の反乱への対応にあたって、植民者の「通常」の道徳はかなりの程度まで制限されたのである。